

Integrated
Human
Studies



2010.3

No.46

京都大学 総合人間学部 広報

特集 ご退任を迎えられる先生から

まずは一冊の古典を.....	福岡 和子.....	2
教養教育としての少人数教育に関わって		
—教養部ゼミナールと全学共通科目基礎ゼミ—.....	西井 正弘.....	4
うかつな話.....	三原 弟平.....	6
春秋.....	堀 智孝.....	8

特集 ご退任を迎えられる先生から

まずは一冊の古典を

福岡 和子 (人間科学系)



いよいよ京都大学を定年で辞することになるとは、いまだに自分でも信じられないでいる。学生のころから数えると合計で36年もいたことになる。時計台の姿は昔と変

わらないものの、その建物の中に日曜日ともなれば多くの観光客の姿が見られるようになるなど、京都大学の様変わりにもかなりのものがある。しかし、おそらく私がいる間にもっとも変化を受けたのは、我々の学部であるかもしれない。古色蒼然としたかつての教養部の建物も、大学紛争の荒廃を乗り越えて、今はイタリア製の椅子が置かれるなど、すっかり洒落た(?)建物と化した。建物だけではない。もっとも変化したのは、我々の授業であろう。

私との関連で言えば、まず変わったのは英語教育である。教養英語という言葉はもはや使われなくなり、全学共通科目の英語となった。以前は京大の英語は他大学から出講してくださる非常勤の先生方が呆れられるほどに、その状況たるやひどいものであった。今でも時として学生に話すこともあるが、二回生の英語は毎年一クラス100人を超える学生が受講し、語学教育としては最悪のものであった。しかし、いまや正規のクラスは30人ほどになるなど、かなり改善されて理想に近いものとなり、他大学に比してもかなり恵まれたもの

となった。

私の在職中には、教員の側にも大きな変化があった。教養部から、大学院人間・環境学研究科の立ち上げを経て、総合人間学部が創立された。当然予測されたことだが、1, 2回生の教養英語を担当していた頃に比べると、いまやそれに加えて学部の授業、さらには大学院の授業というように教員の負担はかなりのものになった。しかし、その一方で教養部時代とは異なった教育の楽しみも増えたのである。私の担当は、総合人間学部・人間科学系・文芸表象論となった。

昨年の12月に一人の女性が研究室を訪れてきた。彼女は総合人間学部の理系の出身であり、いまや研究者となって、アメリカ・ペンシルヴェニア州フィラデルフィアの大学に共同研究者の一人として出発するとのこと、その前に挨拶に寄ってくれたのである。なぜ理系の彼女がと思われるかもしれないが、そこが総合人間学部の面白いところである。学部で私が担当する授業には講義、演習があることは他の分野と変わらないが、我々の分野には他にないものがある。それは「作品講読」という授業で、私の場合、アメリカの小説を原書で読んでいく授業となる。講義のように、先生の説明をただ聞いているのではなく、自ら辞書を丹念に引いて授業に臨まなければ付いていくことはなかなか難しい。文学の英語は一般英語とは違う奥行きがある。結構大変なはずのこの授業に毎年続けて必ず出席する学生がいた。勿論単位などは

関係ない。さらには自らの専門も関係ない。原書でアメリカ文学を読む楽しさを知ってしまった彼らは、作品講読の常連となったのである。先の彼女もその一人であった。勿論そうした常連のなかから、アメリカ文学を専攻して、大学教員、出版社の編集者、高校の教師、ジャーナリスト、公務員などになって巣立って行った学生諸君もいる。これから大学を去ろうとしている私にとって、彼らと小説を楽しんだ時間が何よりも貴重な思い出として残ることになるだろう。

また私が京大にいる間に、文学研究自体にも変化の大波が押し寄せたのである。学生として文学研究に関心を持った頃は、いわゆる「新批評」と呼ばれる研究方法が隆盛の頃で、その close reading を何よりも旨とする方法論は京大の伝統的風土にも受け入れられやすいものであった。しかし、そのあまりに禁欲的で他の学問分野を排除する方法論は、以後様々に批判の対象となってきた。その結果、いまや文学研究は貪欲に他の分野の研究成果を取り込んで自由に議論ができるようになったのである。歴史、政治、経済、精神分析、ジェンダー論、宗教などなど。もっとも新しいところでは、「環境批評」というのが文学の学会で聴衆を集めている。いまやテキスト内部のみに議論を限っているだけでは十分ではなく、研究者に幅広い知見が求められるようになってきたのである。私の持

論であるが、そうした昨今の文学研究の方法論は、まさに学際研究を旨とする我々の総合人間学部こそふさわしい。この学部を巣立っていった諸君には、専門領域のみに閉ざされた関心を持つのではなく、広い複眼的視野を持った研究者が育っているはずと期待を抱いている。自由に様々な学問を究めることのできる、まさに総合大学京都大学の縮図といってよい総合人間学部の学生にこそ、もっともっと文学を読んでほしいと思っている。ひょっとしたら総合人間学というのは文学研究の別称であるかもしれないのだ。文学は遠い過去から築き上げられてきた人類の遺産である。総合人間学部の学生諸君に、まずは一冊の古典を手に取り楽しんでもらいたい。それが去るに当たっての私の希望である。

(ふくおか かずこ)



総合人間学部の授業風景 (2010年1月20日 研究室にて)

教養教育としての少人数教育に関わって —教養部ゼミナールと全学共通科目基礎ゼミ—

西井 正弘 (国際文明学系)



京都大学を定年退職するにあたり、1982年4月から2010年3月まで、28年間に涉って携わってきた「少人数ゼミ」について述べてみようと思いません。

最初に関わった少人数教育は、1969年1月から京都大学でも始まった「大学紛争」と関連したものでした。1969年当時、私は、法学研究科修士課程の1年で、国際法の研究を始めたばかりでした。その頃教養部では、「ストライキ」が行われ、授業がほとんど行われていませんでしたが、「法学」を担当されていた安藤仁介助教授が、2回生の6人の学生に頼まれて、「自主ゼミ」をしていらっしゃいました。ところが、在外研究のためだったと思いますが、安藤先生から「ゼミ」を引き継ぐよう依頼されたのです。E.H. カーの『両大戦間の国際関係史』を学生が分担して報告し、その後、Brierly, *The Law of Nations* を読んで1年が終わった記憶があります。こちらも院生でしたし知識が十分にあった訳ではありませんが、学生たちと議論するのが楽しい毎週でした。

1982年から京都大学教養部で教鞭をとるようになって、「法学」（通年4単位）2コマと、主として法学部の学生たちが、「自主ゼミ」と呼び、教養部教授会は、「法学ゼミナール」（2回生配当、通年4単位、増加単位）と呼んでいたゼミ1コマを担当しました。この年は、法学部5組の学生が中心で、このゼミでは刑法の勉強をしたいという希

望でした。学生代表と話し合う中で、田岡良一先生の『大津事件の再評価』（有斐閣）を読むことになりました。これは、犯人に対する死刑適用をめぐり司法権の独立の先例として有名な「大津事件」を取り扱ったものです。通説とは異なり、国家を拘束する「口頭による合意」が日露間に存在したことが理由で、明治政府が犯人津田三蔵の死刑に執着したとの学説は新鮮でした。

その後は、毎年国際法を中心とした「法学ゼミナール」を、法学部の学生代表と相談しつつ開講してきました。そのような事前打合せが無くなったのは、大学紛争の影響が薄れてきた1980年代の後半からだったのでしょうか。もちろん他学部の学生も受講できるのですが、教養部廃止までの11年間に、私のゼミに所属した学生は、延べ205名、内法学部生が173名で、他学部生が32名でした。「チューター」と称して、法学研究科の後輩に、無給でゼミに出てもらったことは、学生に大変良い効果を生んだと確信していますが、それは私の最初の「自主ゼミ」体験がもたらしたことでもありました。

当初、現在の総合館（当時A号館）中庭にプレハブの演習室があり、そこでゼミを行っていました。床下を犬が走り廻るといったことも有りましたが、定刻を過ぎても議論を続けることが再々でした。「卒業要件」に含まれない「増加単位」であったことが良かったのでしょうか。私も、30代後半から40代前半で、気力に溢れていたのかも知れません。毎年、ゼミ旅行で、各地を旅したことも懐かしく思い出されます。

総合人間学部に1期生を受入れた1993年4月には、アメリカ・ヴァージニア大学ロー・スクールで在外研究中でしたが、同年後期から、「国際関係論基礎ゼミナールⅡ」(4単位/全学共通科目)を担当し始めました。その後、全学共通科目は、「国際関係法基礎ゼミナール」Ⅰ(国際人権法)、同Ⅱ(国際環境法)と名称を変え、 Semester制の実施に伴い、通年4単位から、半期2単位(各前後期)に変更になりましたが、17年間で京都大学10学部全ての学生約200名と議論を続けることができました。

学問領域を体系的には学んでいない学生を相手とするため、「事例」を中心に、また基本書を輪読する方法で、共通の問題意識を形成していきました。「ティーチング・アシスタント」の採用が認められるようになってから、人間・環境学研究科の院生が、毎年学生とは年齢差が1歳ずつ離れて行く私と学生の間立って良い影響を与えてくれました。近年は、他大学のゼミと、人権か環境について、「合同ゼミ」を実施してきました。鳥取環境大学、海上保安大学校、北九州市立大学での合同ゼミでは、両大学の学生とも「燃えて」いたように思います。きちんとした記録を残さなかったことが残念です。

28年間にゼミで机を囲んだ400名強の学生は、京都大学に入学してきた学生数に比べればわずかなものでしょう。私が担当した全学共通科目の講義の受講生数に比較しても、その何分の一にしかならないでしょう。しかし、教育とは、教師が学生に何らかの影響(学問それ自体を含みますが)を与えることであるとするならば、それは数の問題でも、効率の問題でもないはずで、少人数教育でなければ達成できない「密度」が、そこに生じるのではないかと考えています。

(にしい まさひろ)



最終講義の様子

(2010年1月20日(水) 吉田南総合館東棟 共東32)

うかつな話

三原 弟平 (文化環境学系)



長い時間をついうかうかと過ごしてしまい、気がつけばもう二ヶ月後にはここを去っていく身になってしまった。いまあらためて思いかえせば、まず頭に浮かんでくるの

は教養部時代の教授会のことである。吉田南四号館と現在はその名を変えているが、以前あそこはE号館と呼ばれていた。ここにやってきた三十一年前、教授会はその三階、E30番教室で行われていた。初めての者には目もくらむような階段教室で、もうもうと立ちこめるタバコの煙のはるか下のほうに教養部長や司会進行役の姿がかすんで見える。煙の充満した燻し部屋に入ったようなもので、一度教授会に出ると匂いが数日間はずいているものから取れなかった。司会進行役はすべてのひとに回ってくる輪番制をとっていて、のちに一度だけ自分もこの役をつとめることになる。

それにしてもE30番教室での教授会を初めて経験したときは驚いた。まるで巣分れする際にミツバチたちが形づくる黒い群れのように、議事のつづくあいだじゅうこの階段教室全体がワンワン唸りをあげているのだ。私の座る位置はだいたい決まっていて、最後尾の右端、階段状にせりあがっているこの教室の後ろの出口に一番近い席だった。それには理由があって、当時は三百名くらいのお出席者数をかぞえていた記憶がある。これだけの人数だと、会議が終わってもE号館の外に出るまでに相当時間がかかるので、終わったらすぐに

飛び出していくためでもあった。数学の森毅氏などの席もだいたい決まっていて、私どもの座る一列まえあたりだった。私どもというのは、ドイツ語教室の何人かも、なんとなくこの最後尾の右あたりに席を占めるようになっていたからだ。そして、森氏の座る付近にもやはり数学教室の方々が何人か座るようになっていた。

明らかに森氏は教授会という行事ごとを心から楽しんでいて。しかし、真面目に議事を追うというのではなく、たいていは横を見たり、後ろ向きになったままで相好をくずし、教授会のあいだじゅう駄弁っておられるのがほとんどだったが、ときたま前をむいて小声でヤジを入れたりすることもある。どういうきっかけからか、ある時などわれわれの周囲では話題が原稿を書く際の句読点の打ち方に移っていき、俺はこうしている、私はこうすると、あたり一帯に時ならぬ談義の花が咲いた



池田浩士氏の定年後のお祝いに、滋賀県の霊仙山に登った折のもの (2004年夏 左から道籙泰三氏、池田氏、そして私)

ことなども思い出される。

そう、あのころの教授会はそれこそ雑談の巷だった。問題をはらんだ議題になると部屋全体がひとつに集中することになったが、ふだんはたいいあの巢分れ時のミツバチ状態で、彼らの羽音にあたるのがE30番教室の場合はそこここに花開いている雑談のざわめきだったのである。何しろ定員数が多く、あまりまじめに出席せずすんだのもありがたかった。それでも夏休みまえと学年末の教授会には欠かさず出かけていたように思う。そして去っていかれる先生がたの御尊顔を拝し、新しく入ってこられた先生方がお辞儀されるのを最後尾の席から見ていた。

あれはいつごろから始まったのだろう。ある時から新しく入って来る人も出て行く人もなくなって、教授会では十年一日のごとく同じ顔が席を占め、話好きは雑談を繰り返し、そのまわりで人びとは笑い、タバコをすうやら、パイプをくゆらすやら。それが来る年も来る年もつづいた。そんな印象だったけれど、人の出入りは年二回あったから、あのときの私の時間感覚は二乗されていたのかもしれない。春風駘蕩、春の海、ひねもすのたりの波のうねりにも似て、私は、もしかしたら世にいう〈黄金時代〉というものはこんな感じのものだったのかもしれないと思った。



集中講義で教えた東京外大生が、
昨年研究室を訪ねてきた折のもの

それに気づいたのは何時ごろだったろうか。ここに入ってくる人がいないのは、やめていく人がいないからだ。やめていく人がいないということは、その年に定年を迎える人が採用されていなかったということだ。それがこうしてつづいていくのは……。それは戦争で死んだ世代なのだ。それがなければ、われわれと同じようにここで研究生を送って定年でやめていくはずの人たちの席が、空白のままになっていたということなのだ。そして、うかつな私だけがそのことに気がつかなかったのだ。〈黄金時代〉などと能天気なことを考えていただけに、そのことに気づいたときのショックは激しいものだった。それからまだしばらくは、去る人も入ってくる人もいない時期がつづいたが、いまはそれを悪夢のようなものとして感じる事となってしまった。空白の時の長さを、わが身の丈で測ることになってしまったのである。

あとで考えれば、この〈教養部〉という組織体自体が、若くして死んでしまい口をきけぬ空白の世代の人たちに後見されて発足したようなものであった。その後文部省が大綱化の法令を出し教養部の解体が始まったとき、空白な世代の人たちの後見がもはや失われてしまったものとして私はそれを感じた。教養部の学部化には反対の一票を投じたが、以来そのような決定のときはすべて多数決の波に呑み込まれていくこととなった。あの時始まって今にいたる改革はすべて、E30番教室で行われていた教授会の精神にもとるものであることだけは確かなように思う。

(みはら おとひら)

春秋

堀 智孝 (自然科学系)



－山芋 (1998年)－

水圏化学研究に精進致しておりますが、時折暇を造って山芋を調べています。異常気象が定常化したときの備えですが、私の連れ合いは、「あなた

独りだけが生き残る積もりですか」と冷やかに侮っています。

山芋は実に優れた生鮮緊急食糧の一つです。この芋は、必要となるまで活かしたままで保存できますし、生食に風味と旨みがあります。とりわけ興しろいのは、掘りあげるまで年率7歩の複利で着実に増え、10年で2倍になります。適度の日射しささえあれば施肥灌水の要なく、礫や粘土中でも育ちます。「芸が身を助くるほどの不幸せ」と申しますが、山芋のこの特性こそが大事であるという研究成果が未来永劫、お役に立たないことを希っています。

－不可知 (2003年)－

昔、いくら考えても解らないことは遠くに据えて頷えよと教わりました。孔子が教えるところの、いわゆる不可知論です。昨今は、解らないこと、答えが想い描けないことは切り捨てよと迫られます。かくして、ものごとをどう考えたらよいのかで途方に暮れる毎日であります。折しも昨年7月23日の昼下がり、京都疏水が暗緑色から無色透明になったのです。水底に群遊する小魚は、突然纏っていたパールを剥がされ、気恥ずかしそうにも見えました。毎秒20トンで流れる疏水から200 ml

の水を汲み取り、そのまま冷凍保存することに致しました。答えが見え始めたら解凍して、化学分析を致します。

－野趣 (2004年)－

天然もの魚介の旨味を美食家から教わりますが、私は生来の味音痴で、養殖ものに比べてその差が分からないのです。この音痴が、この冬、天然ものの野菜が養殖もの(栽培もの)とずいぶん違うことに気づきました。収穫量に限りがあって皆様にお分け出来ないのですが、除草・散薬・灌水・施肥など全く無し、周りのはこべらに埋もれながら、ようよう生き延びた野菜、字義通りの「野」菜です。もちろん市場価値はゼロ、それでも一口頬張ると霜柱が崩れるようにさくさくと折れ、野趣に富んだ香味が広がります。この自然野菜は、昨年の秋以来老母の介護を優先して、種まき以外の手入れをしなかった結果です。介護のご褒美、天の恵みと存じますが、守株に陥らないように気を付けます。

－校門のコスモス (2005年)－

毎朝、勤務地に到着する直前に小学校の校区を横切ります。この公立小学校は服装に規制が無く、生徒は様々な格好であちこちの路地から集まってきます。こどもの密度が高くなる校門付近は、天然自然のコスモス畑を想わせます。そのうえ彼らの持ち物がかなりの年代物、骨の折れた傘は急な雨を半分しか凌がないのです。それでも、洗濯がよく行き届いた衣服には清潔感と安堵感があって、小針で丁寧に繕ってある小袋からは子供の成

長を願う親の祈りが伝わります。この学校を、高名な文士や芸術家の多くが母校としています。長い時間を掛けて成熟した、学校と家庭の初等教育への関わり方を目の当たりにするのが朝の楽しみです。今朝すれ違った彼らの成人した姿をいつかどこかで見たいと思います。

－文理の壁（2006年）－

文科系の1・2年生に、化学の講義をするように命ぜられて、10年を超えました。応用や各論は、ひととき学生の興味を惹きますが、まもなくその反動で欠席者が増えるのです。そうかといって、理論や方法論を、人類共通の財産として説き始めると、同僚教員から大いなる不安が寄せられます。文系学生から見た理系の壁は、外国語を習得するときの壁に似ています。文理の壁にも、言語の壁にも、その壁の越え方におもしろさがある、成功しても失敗しても、この壁は後半の人生において、多彩な自慢話（失敗談）を生むようです。

－老若（2007年）－

奇妙な現象ではありますが、希少種に皆が注目し、動物か植物かに関わらず、唯ただ少ないという理由だけで、少数種を大事にします。一昔前まで、人間社会には百歳を超える長寿者が希で、皆々長老を大事に致しました。崇敬の念をもって大事にすればよろしいのですが、珍しさがその理由だったらしいのです。近年はその逆に、専任の大臣までにおいて、少なくなりつつある子供を大事にしています。次世代をしっかりと育てたいと言うなら大賛成ですが、年金を支えるための要員として養育保護するとのことです。誠にまことに、表層的な議論が先行致します。男女と同様に、老若は一体不可分、互いに相手の存在が不可欠という結論を導かなければいけないのです。政治と経済が社会の根幹を壊しましたので、いよいよ（不幸なことですが）大学の出番が来たようです。

－酒の功罪（2009年）－

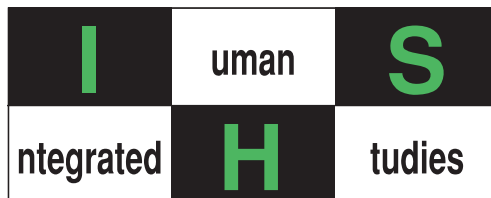
軽く御酒を聞こし召した同僚教員が、偶々そこに居合わせた院生数人に説教をしてくれました。曰く、「こらおまえら、学問を軽く見てるやろ！もっと気合い入れてやれ!!」と。天守閣の大太鼓を想わせるその声は、皆々腹に染みしました。太鼓の響きに濁り無く、ぶれ無し、強弱と休止符も上等でした。教育は、授業とゼミだけでは足らんなど自省しました。私は亡父から飲酒の遺伝子を十分受け継いだのですが、酔い方が下手なのです。今後も授業料がかさみますが、いままし飲酒の訓練を積むことにします。酒の功罪、なんとも気になる課題です。

リベラルアーツ。自由学芸との訳が付いています。この「自由」は何でも学べるというよりむしろ、苦役から解放された「自由」と解したいです。奴隷や貴族は遠い昔の話、しかし現代でも、ひととき心を解放して、学問のおもしろさを共有するのは大事だと思います。学芸が役立つのは希ですが、時々立ち止まって、この世に人間として生まれてきてよかったなと感じる機会を増やします。定年退職まであと1年、Liberal Arts & Sciencesに励みます。

－謝辞（2010年）－

いくら圧巻の広辞苑でも、単語の収録数には限りがあります。しかし、これら限りある単語の組合せから、人は珠玉の文芸を紡いできました。組合せの妙であります。人環／総人は、教員・学生・職員が日々それぞれに個別の責務に専念していますが、時折、気まぐれで面白い連携をやるのです。この連携は、“当面は無益なことへの好奇心”が発端ですが、それがやがて仲間内で“相互触発”で連鎖します。つまらない仲良しよりは、上等の敵を周りに置いていることが大事だと、つくづく思いました。私こと、この変人を30年の長きにわたって大事にして下さり、ありがとうございました。

（ほり としたか）



編集後記

◆『総合人間学部広報』No.46 をお届けします。この三月にご退任を迎えられる四名の先生からお言葉をいただきました。語り口といい中身といい随分とバラエティに富ん

でいて、薄いながらも読みごたえのある冊子になりました。御礼申し上げます。昨秋に退任された鈴木雅之先生と合わせて五名の先生方が去られることとなり、大きな世代交代の始まりを予感させる春となりました。先輩諸先生の築かれた総合人間学部の伝統を守り、さらに発展させていく宿題を課せられたような思いがいたしております。

執筆下さった全ての先生方に感謝申し上げます。

(O・K)

人間・環境学研究科
総合人間学部

広報委員会